



玉井敬之



玉
井
敬
之

検 印
省 略

平成二年十月十日 初版印刷
平成二年十月二十日 初版発行
高畑 の 家 * * * * *

定価 三、〇九〇円

(本体 三、〇〇〇円)

著 者 * 玉 井 敬 之

発行者 * 坂 倉 良 一

印刷所 * 西 村 印 刷

発行所 * 榎 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町一―三―一

振替京都六―一八〇二〇

電話〇三―二九五―八七七―

Printed in Japan

高畑の家 目次

高畑の家

有終館

音読小感	7
------	---

あの本・この本	13
---------	----

『フランクホーレー氏蒐集和紙關係文獻目錄』と『紙漣村旅日記他』

中川芳太郎著『英文学風物誌』

図書封印事件について

私の卒業論文	30
--------	----

或る感想	36
------	----

私のテーマ	42
-------	----

羽仁新五のこと	46
---------	----

電気ブラン	50
わがゼミナール	58
個人主義の淋しさ	60
「小野十三郎展」印象記	62
武漢大学見聞記	68
武漢紀行	76
「継統中」	90
小島輝正を憶う	96
二つの日記から	100
追想金沢行	106
詩の読者	112
小島誠の日記	120

電話	128
詩人の行方	136
詩人の消息	142
無題	148
電話がかかってきたら	156
篆刻と私	164
風景としての江南	170
犬が嫌い	174
鷗外と奈良	184
あとがき	200

高
畑
の
家



白毫寺門前

音 読 小 感

私はここ二、三年来、出講している大学で『たけくらべ』の講読を続けてきた。といっても、別に変りばえのしない仕方であって、前もって二、三の学生を指名して、当日になると報告させていたのである。その報告は、もちろんそれぞれの精粗のちがいはあっても、あたえられた範囲の限りでは、ともかくもやりこなしているように思えるものが多かったようだ。しかしあるとき、報告者の一人に『たけくらべ』の真筆版を示して読ませてみたが、これは私がほぼ予想していた通りまるきり読めなかった。その教室には、大学院で近代文学を専攻し修士論文に樋口一葉をとりあげようとしている女子学生が、たまたま聴講していたので、試みに彼女にも読ませてみたが、読めた、というにはほど遠いものがあつたように思う。これだけで云いきるにはややためらいを感じるけれども、吉田精一氏が本誌第四集でもいっておられたように、近代文学専攻の側からみると、もはや写本、板本の類は、縁遠いものになったことは否定出来ないであろう。自戒をふく

めてそう思う。しかし私が言いたいことは、もう少し別のこと、あるいはもっと手前のことなのだ。

さてそこで、今度はテキストに使用している文庫本の『たけくらべ』を、その場で指名して何人かの学年に音読させてみたところ、これも読めた、というにはおよそほど遠いものがあった。これは私の予想外のことであった。字が読めないというのではない。多くは棒読みに近いものになってしまいか、文章の切るべきところを切ることが出来ずに、いわゆる「弁慶読み」のようなものになってしまふのである。そうなれば『たけくらべ』のあのリズムミカルな文体、叙情性は完全に破壊されているのである。要するに文章のリズムにのることができないのである。

このことは、学校教育のなかで、とくに国語教育において音読の位置が、相対的に低下していることも関連しているのかも知れない。たぶん私の見当ちがいなのだろうが、教室での教育法においても、音読よりも黙読のほうが、その読みの緩急、主題の把握、段落の発見、文意の追求等で、重要視されているように思われる。たしかに黙読は音読よりも自由であり、思考の法則にもなっているであろう。だから大学の講読でも一般に語学を除いては、音読がいわば軽蔑すべき

位置に落されたのは、やはり当然であったといわねばならないだろう。他の大学で講読を担当している知人に聞いてみても、音読をさせているというようなことはなかったようである。

とくに近代文学の場合には、すでに故伊藤整氏や中村光夫氏がしばしば強調されていたように、密室の孤独のなかで作家のひそやかな内なる声を、耳を傾けて聞くことにあるとしたら、黙読は、さらに読み手の内なる声と呼応し対話すること、それにもっともふさわしいものであろうことはいうまでもない。

しかしつとに前田愛氏が『音読から黙読へ』（『国語と国文学』昭三七・六）のなかで論じておられるように、近代文学は黙読がその読みかたのすべてではなかったのであって、明治初期は、音読が読書としては一般にゆきわたっていたようなのだ。私もまた伯父が老眼鏡をかけて、そのうえになお大きな天眼鏡を覗きながら、まるでお経のような「一種異様」な節をつけながら本や新聞を読んでいたことを記憶している。そうして前田氏は、一葉もまた、小説を母滝子に読んで聞かせていることを指摘されているのである。そのような音読の習慣を身につけた人の作品が『たけくらべ』であったのだ。おそらく『たけくらべ』のリズミカルな文体は、声をあげて読み、人に聞かせるために読んでいた時代だからこそ、うま

れることが出来たのではないだろうか。

これはもちろん『たけくらべ』だけではないだろう。完成した作品を人の前で音読することや、制作の過程で文章を口ずさみつつ彫心鑠骨するさまは、かなり久しい間作家の習慣になっていたようである。このようにして音読というものを通して、表現は獲得されていった。作家の内なる声に耳を傾けるという文学的習慣は、ようやく自然主義以降に属するようなのだ。とすれば音読は文学史的にも意味があるのであって、その表現と文体を読みとるためには、音読ということを考えてもいいのではないかとも思うのである。私は私なりに前田愛氏の所説を確認するところから出発しなければならない。

そこで、といってもそれほど確固とした気持からでもなかったが、しばらくの間、教室で学生に『たけくらべ』の音読をさせることにした。つまりは文学史的に云々というよりも、むしろ学生の読解力を知りたいためにそうしたというほうが、やや実情に近かったであろう。一人の学生を指名する。そのとき指名された学生は、突然の、まったく予期することができなかったためだろうか、一瞬呆然とした顔になり、ついである名状しがたい気恥かしい表情になり、いまさら、この年で音読でもあるまいにとでもいうように、うらみがましくぶつぶつと小声

で、しかしたどたどしく口早にあたえられた範圍をすませようとするのだ。この、いまさら音読でもあるまいに、という気持はしかし私にもある。そこで、読ませているものと読んでいるものとの奇妙な共感が、この教室で成立する。

これはどういうことなのだろうか。つまり、声をあげて読むという行為は、われわれにとって何かぎこちないものになっているのである。そしてそれは読書の習慣が身につけばつくほど、そうなっていくようだ。

しかし昨秋の日本文学協会の大会で、那珂太郎氏が「詩の教育について」という講演をされた。萩原朔太郎の『竹』について精緻な考察をされたあと、この詩を読まれたときの感動は、今も忘れることができないのだ。会が終ってから成城の駅前の喫茶店に、那珂氏を囲んで何人かの人が集まった。私もそのあとについていったのだが、そのとき誰いともなしに、那珂さんのように教室で詩が読めたら、教えるものも教えられるものも幸福だろうなあとという、ほとんど嘆声に近い言葉が漏れたのである。私もまったく同感であった。那珂氏が読まれた『竹』は、このとき一瞬にして私の身体をつきぬけたように思う。それは私にとって幸福であった。音読によってしか到達することの出来ない「詩」が、そこにはあった。しかしこれは誰にでも出来ることではないだろう。

音読が作品の理解に適しているとは、いちがいにはいえないだろう。しかしある種の文学の場合、その表現と文体とを知るためには、作家のひそやかな声よりも、その肉声を聞くことのほうが大事なのだらうと思う。そこに到達するには、音読ということも一つの方法としてあるのではないだろうか。もちろんそのさい、過度の感情移入は排斥されねばならないし、また読みの技術の次元での問題でもないだろう。むしろ音読が習慣でもあった時代の文学の固有のものとして、いわば史的展望のもとで音読というものをとらえてみることなのだ。

もしそれが可能であるならば、大へん樂觀的かも知れないが、その瞬間だけでも、那珂氏が『竹』を読まれたときに感じたような幸福が、われわれに訪れてくるかも知れないのである。

（『日本近代文学』第十五集 昭和四十六年十月）

あの本・この本

「フランクホーレー氏蒐集和紙關係文獻目錄」と「紙漣村旅日記他」

古書目錄やある主題の文獻目錄を、つまりいわゆる書目を愛用し、それによく目を通しておられる人たちがいる。書目編纂の目的がさまざまであり、種類も多いうように、その利用も多方面にわたるであろう。実用的に利用されてもいるし、また仕事の暇にひもとき、ある意味では消閑の具として使われている場合もあるだろう。人によって、また時によって目錄をみる条件は異なっているのだろうけれども、私にとって目錄とは既知の事柄や過去をあらためて確認させてくれるものでもあり、またそれまでまったく知らなかった世界を開示してくれるものでもあるようだ。普通の場合、目錄には書物の形態や装丁や、内容を除く書物のすべてがしめされている。掲載されている未見の書名は、あるときには、私たちを想像の世界へもみちびいてくれる。目錄は不思議な魅力を持っている。

さらに蔵書印や識語などについても詳しく注記しているようなものであれば、書物の伝わった経緯のおおよそなどもわかり、歴史のなかにもみちびいてくれるのである。

そうはいいいながら、私は書目によく目を通す、それを愛用している人々の部類に入るかといえば、そうではないだろうと自分で思う。書目との交際は必要最少限でしかない人間だと思うけれども、それでも私の机辺にはいくつかの書目類がおかれてはいるのである。そのうちの好きな目録の一つに、『フランクホーレー氏蒐集和紙關係文獻目録』（弘文荘 昭三六・六）というのがある。もう十数年前この目録の印行に尽された人の一人である若林正治氏から頂戴したものだ。反町茂雄氏の「序」にもあるごとく、故ホーレー氏の古典籍蒐集は「質と量を兼ねて優秀」なものだったのだろう、これまた十数年前、勤務先の大学図書館での古俳書目録作成のため、天理図書館において木村三四吾氏、島居清氏から御指導をうけていたとき、そこでしばしば「寶玲文庫」の蔵書印のある書物をみせていただいた記憶がある。この『和紙關係文獻目録』は「この目録の用紙はホーレー氏にゆかりの深い奥州白石産の上質厚手の和紙を用い」と「凡例」にあるように、まことに趣のある名と体とが一致した、きわめて手ざわりのいい目録である。